８１期岡山労働学校　第４講義

封建制社会と宗教的世界観について

２０１１．６．２

岡山県労働者学習協会　長久啓太
ブログ「勉客商売」　http://benkaku.typepad.jp/blog/

≪前回の第３講義のふりかえり≫

①最初の哲学者たちは、ギリシアの植民都市ミレトスで生まれた
②万物のもとのものは何か？を、神々の物語の説明ぬきに、自然のあるがままの姿のなかに見いだそうとした。「水」「無限のもの」「空気」などと考えた。
③それは、唯物論的態度の自覚的な始まりだった。先入観や偏見なしにものを見る。それまでの常識的なものの見方への挑戦でもあり、感覚や理性で吟味できること。
④前の人の考えたことを「吟味する」「問う」ことを通じての発展。学問的態度。
⑤民主主義と哲学は相性がいい。自由な議論ができてこそ、学問も発展する。
⑥ピタゴラス、ヘラクレイトス、デモクリトス･･･豊かなギリシア哲学の中身

一。アテナイ期の哲学について

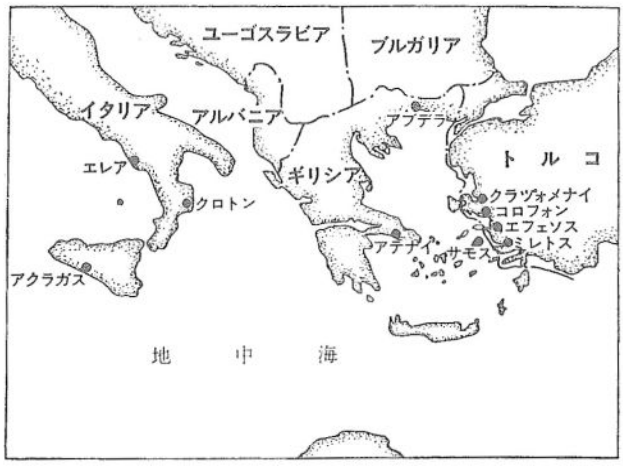
１。哲学の中心が、周辺の植民地都市から、アテナイへ移ってきた時代

◇ギリシア人の社会に大きな変動が起こった結果

＊原因の最大のものは、ペルシア戦争（紀元前 490～477 年）
＊東方の大国ペルシアが、大軍をひきいて攻めてくるという国家的危機
＊そのなかで、アテナイの海軍が活躍し、からくも勝利。この結果、アテナイが全ギリシアの中心勢力にのしあがった。
＊ペルシア戦争の際に、アテナイは平民を水夫として大動員。戦後の平民の発言権は増大した。貴族は、従来のように家柄がよいというだけでは政治的な高い地位につくことができなくなり、多数の市民の支持をうけることが必要となり、言論の力が増大することとなる。ただ、当時のアテナイで市民権をもつものは、全人口の１０％ほど。他の都市出身者や、女性、人口の半分を占めた奴隷は無権利。
＊ペルシア戦争によって打撃を受け疲弊し、商業的繁栄を失った商人たちが、周辺の諸都市からアテナイに流れ込んできた。

◇ソフィストたち

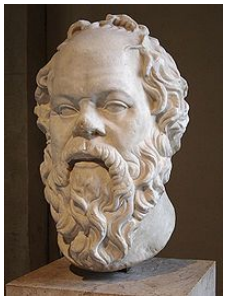
＊売るべき商品を失った商人たちは、植民地都市で発達した唯物論哲学（主として自然にかんする学問）の教養を身につけた人たちでもあり、その自分自身の知識を切り売りしようとし、みずから「ソフィスト」（知者という意味と教師という意味をもつ言葉）と名のり、アテナイで活動した。



＊しかし、ソフィストたちの自然への知識をお金を出して買うほど、アテナイ人は余裕があったわけではなかった。そこで、ソフィストたちは、学問の探求の目的を、「自然」ではなく、ノモス（法律、道徳、習慣など、人間社会にかんする事柄）へと向け、「市民の術」を教える教師だと称するようになった。

＊「市民の術」とは、つまり弁論術のことだったが、当時、裁判や政治上の争いに勝つためには言論の力が必要だったアテナイの青年貴族たちは、あらそってソフィストたちのもとにおもむき、多額の礼金を払って弁論術を学んだ。

＊ソフィストたちの中には、「人間は万物の尺度である」（プロタゴラス）といった神を万物の尺度であるとする見方にたいするアンチテーゼを述べる人物もいたが、多くのソフィストたちの態度は、何が真実であるかということを問う学問ではなく、何を本当らしく相手に思わせるかという術、うまくいいくるめるための弁論術へと堕落していった。



◇ソクラテス（紀元前 469～399 年）

＊きっすいのアテナイ市民であり、ソフィストたちやそれに追随して表面的な議論に終始する政治家の態度を深く憂いていた。

＊貴族出身ではあったが、ぼろぼろの衣服を身にまとい、裸足でアテナイの街頭にあらわれては、青年たちをつかまえて「正義とは」「勇気とは」というようなものが何であるかについて問答をふっかけていた。

＊彼はソフィストたちとは違い、金もうけになることはいっさいやらなかったので、晩年はかなり貧乏だったと言われている。また、一般のアテナイ人が興味を示さなかった時期に、すでに自然科学の教養や学問的態度を身につけていたとも言われているが、「自然」だけに満足せず、「人間的なもの」や、いまでいう「道徳観」のなかに、絶対的な真実があると考え、その根本原理を探究しようとした。

＊大事だな、と思える彼の態度。

「ソクラテスは誰とでもよろこんで対話した。だがとりわけ青年期の若者たちとの交わりを歓迎した。（略）ソクラテスはかれらが未熟な質問をかさねても、けっしておとなの経験を楯に高踏的な口調でそれを封じこんだりはしなかった。かれは若者たちの心のなかで進行しているすべてのことを知りたがり、あらゆる主題について、とりわけ正しさと間違いについて自分たち自身で考えるよう、積極的にかれらを励ました。かれはつねに曇りのない率直さで、かれ自身が探究者であり、何も知らず、何も教えるべきことを持たず、あらゆる問題を開かれた問題とみなしていることを言明した」

「若者たちと話すときのソクラテスのやりかたはそれとは違っている。かれはまず、かれらを困惑させることから始めるが、それはかれらに自分たちの理解が実際にはどれほど不十分なものかを気づかせ、すすんでかれらと共同で真実を探究する気にさせるためである。ひとたび純粋な探究が開始されたなら、かれはいつでもその対話相手を論敵としてではなく、仲間にして盟友たるものとして取り扱う」

（Ｆ・Ｍコーンフォード『ソクラテス以前以後』山田道夫訳、岩波文庫）

「かれは、ある人の行為が『善い』といわれるばあいに、そのような行為を『善く』あらしめるところの原理・原因は何か、という問題を、真剣にかつ情熱的に追求したのです。そしてけっきょくかれは、その原理・原因を、おのれ自身の『魂の善さ』にみいだしました。世間の人びとは、大工とか馬の調教師としての善さ（職業的知識）や、軍隊指揮者としての善さ（専門的知識）を求めることだけに熱心で、それよりもいっそう大切な、人間としての善さを求めることを忘れている。こう考えるにいたったかれは、街頭にでて青年たちと問答をはじめ、青年たちの心の中に真の（魂の）善さをよびさまそうとしたのです。その場合にソクラテスは、『魂の善さ』とはなんであるかを、自分のがわから説くことをいっさいやりませんでした。ソフィストとは反対に、かれは、自分は『無知』である、といい、知らないからこそ『知恵を愛し求めるもの』である、といいました。こうして、わたしは知らないからこそきみが教えてくれ、という調子で問いかけながら、相手がなにか答えると、その答えをこまかく分析し、１つ１つ反論していって、ついには相手をどう答えてようかわからなくさせてしまうのです。このようなやり方が、ソクラテスの『問答法（ディアレクティケー）』とよばれているものです。ソクラテスはなぜこんなことをしたのでしょう。それは、かれのいうおのれ自身の『魂の善さ』を知るとは、これこれであると説明されてわかるといったものではなく、各人が真の自己、自我そのものに目ざめることによって、自己自身を実践的主体として自覚することだったからです。（略）このような自覚には、自分で積極的に考えぬくこと以外の道で到達できるものではなく、ソクラテスの問答は、青年が自分でこの自覚に到達するための生みの苦しみを軽くするための産婆の役割をするものにほかならなかったのです」　　（西本一夫『唯物論の歴史』新日本新書、1970 年）

＊しかしこのソクラテスの活動は、同時代の多くのアテナイ人からは理解されず、逆に「国家の祭る神がみを認めず、新奇なる宗教行為を導入し、さらに青年を腐敗させる罪を犯した」という理由で告発され、裁判にかけられ、処刑されてしまう。

＊「魂の善さ」というものを、抽象物としてとらえようとしたという狭さはあるが、「無知の知」への自覚、知への情熱的な探究心とその方法、彼の学問的態度は、いまの私たちにも、大いに学ぶべきところがあるように思う。
＊ただ、ソクラテスは、文章をまったく書き残さなかった人なので、彼のこうした態度や思想は、後世の人たち（とくにプラトン）によって、伝えられているところからの推察であることは、押さえないといけません（汗）

◇**プラトン**（紀元前 427～347 年）

＊ソクラテスの弟子。アテナイの名門貴族の出身で、若い頃からソクラテスの思想的影響を強く受けていた。ソクラテスの死後、多くの「対話篇」を書き、ソクラテスの言行を後世に伝えた。

＊40 歳頃に「アカデメイア」（今日のアカデミーという言葉の語源）という学校をアテナイ郊外に創設し、死ぬまでここで教育活動をつづけた。ちなみに、このアカデメイアは、プラトン死後も継続され、紆余曲折あったものの、約９００年も続いた。

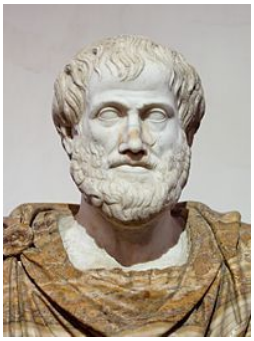
＊彼の学説の中心は「イデア論」

＊「善のイデア」「人間のイデア」「美のイデア」

＊それは、感覚的世界を超えて存在する、精神的・観念的存在。タレスからデモクリトスにいたる唯物論哲学にたいする反撃という意味あいをもった。

「プラトンのこうした観念論への志向は、民主政治にたいする貴族的反動派の一員として、民主政治の害悪からのがれるためにはイオニア自然哲学以来の無神論的唯物論の流れをたたきつぶし、伝統的な秩序をささえるものとしての神話にできることならば復帰したい、という問題意識に発するものでした。対話編『国家』のなかで、プラトンは、神話は『うそ』『つくりばなし』ではあるけれども、それなしには人びとを神聖な伝統的秩序に服従させることはできない『高貴なうそ』である、といっています」

「明るい現実の世界への道をさし示した先駆者たちに敵対して、人びとを薄暗い洞窟の奥に閉じこめようと努力しているものこそプラトン自身だったのです」　（高田求『世界観の歴史』学習の友社）



◇**アリストテレス**（紀元前 384～322 年）

＊プラトンの弟子。医者の子として生まれ、１７歳でアテナイに出てきて、アカデメイアに入学。２０年間ここで勉強し、プラトンの死後アテナイを離れる。

＊生物学の研究に才能を示したアリストテレスの哲学には、経験を重視する特色が強くあらわれている。

＊アリストテレスは、かれ以前の古代ギリシャにおけるあらゆる哲学説に精通していて、それらを総合的に考察して、自分の説をたてた人で、Ｆ・エンゲルスは、「各分野にわたる学識の持ち主」（『空想から科学へ』）と彼を評している。

＊マルクスの『資本論』にも出てくるアリストテレス

「最後に展開された等価形態の二つの独自性は、価値形態を、きわめて多くの思考形態、社会形態および自然形態とともにはじめて分析したあの偉大な探究者にまでわれわれがさかのぼるとき、さらにいっそう理解しやすいものとなる。その人は、アリストテレスである」　（『資本論』原著７３Ｐ）

＊形式論理学は、彼によってほとんど完成されたともいわれる。緻密な知の方法論。

＊プラトンのイデア論への唯物論的立場からの批判。普遍的（一般的）なものは、個別的なもののなかにのみ存在すると主張した。

＊彼の哲学は、経験を重視するという生物学者的な学風をもち、すぐれて唯物論的な傾向をもったが、プラトンの影響は大きく、霊魂や神の存在を前提に考えていた。ただ、彼の哲学は、その創造的な博識さと緻密さゆえに、のちのキリスト教や中世のヨーロッパに巨大な影響をあたえた。

「アリストテレスの哲学は、古代ギリシャにおける、ひいては古代ヨーロッパにおける、創造的な哲学的精神の最後の輝きでした。古代ギリシャ哲学の花を咲かせた土壌となったものは、かれらがポリスと呼んだ都市国家の奴隷制民主主義でしたが、奴隷制民主主義のふくむ矛盾はプラトンの頃にもう危機的な状況をあらわにしてきており、アリストテレスの時代には、ポリスそのものが壊滅させられてしまったのです。ポリスの壊滅とともに、古代哲学の創造的な時代は終わりをつげました。この壊滅をもたらしたのは、アリストテレスが家庭教師として教えたことのあるマケドニアのアレクサンドロス大王でした。

　アレクサンドロスによってヨーロッパ、アジア、アフリカ３大陸にまたがった大帝国がきずきあげられたことにより、哲学をふくむギリシャ文化は、東方・エジプトをふくむ当時のヨーロッパ世界に広くゆきわたりましたが、アレクサンドロスの後継者たちの時代から共和制ローマの時代をへてローマ帝国の末期にいたるまで、ほぼ８００年間、当時のヨーロッパ世界の哲学は、かつてのギリシャ哲学の力弱いさまざまな変奏曲以上のものであることができませんでした。この時期の哲学の一般的特徴は、観念論の場合はもとより、唯物論の場合でさえも、どうすれば個人的な安心立命をえられるかという生活術（処世の知恵）の探求に、哲学の目的がわい小化されてしまったということです」

（高田求『世界観の歴史』学習の友社）

◇ヘレニズム時代とローマ時代の哲学・・・

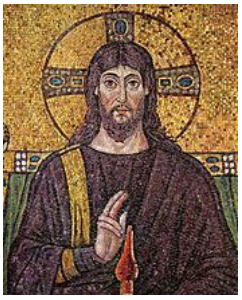
＊ストア派の宿命論的厭世観と個人倫理的道徳主義

＊新プラトン派

＊哲学は、宗教的色彩を強くおびていた。

→ざくっと飛ばします。

二。古代末期の大衆運動とキリスト教



１。奴隷制ローマ帝国のなかから

◇イエスの実像は･･･

＊紀元前４年に生まれたこと、ガリラヤ地方出身の建具屋であったこと、洗礼者ヨハネと出会って洗礼を受けたこと、紀元後３０年頃に処刑されたこと等が事実と考えられる。

＊ちなみに、１２月２５日がイエスの誕生日というのも、史実ではない。この日が決められたのは、西暦３５４年で、それ以前はイエスの誕生日は5月２０日とも１月６日とも推測されていた。

「福音書はイエスの伝記ではなく、イエスが神の子キリストであることを主張するために書かれた、原始教団の信仰告白である。また、だからこそイエスが奇蹟をはじめ、さまざまな神的行為をしても不思議ではないということになる」

（小田垣雅也『キリスト教の歴史』講談社学術文庫）

＊被圧迫者の運動として、解放運動として

「キリスト教がそのはじめには、どんなようなものであったかは、あらためて骨を折って探求されなければならない」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

「原始キリスト教の歴史は、近代の労働運動との注目すべき接点を提示する。後者と同じく、キリスト教は発生時には被圧迫者の運動であった。それが最初に現れたのは、奴隷および被解放奴隷の、貧者および無権利者の、ローマによって征服または撃破された民族の宗教としてであった。両者は、キリスト教も労働者社会主義も、隷属と困窮からの到来まぢかい救済を説く。キリスト教はこの救済をば、死後のあの世の生活に、天国に、社会主義はこの世に、社会の変革におく」

「ローマの巨大な世界権力にたいする、個々の小部族または小都市の反抗は、すべて絶望的なものとなっていた。奴隷化されている者、圧迫されている者、そして貧乏にされている者にとって、出口は、救いの道は、いったいどこに残っていたであろうか？　互いに疎遠な、または対立さえしている利害関係を有する、これら諸種の人間群のすべてに共通する出口は？　それでもやはりそういう出口は見つけられなければならなかった。単一の大きな革命運動が彼らすべてを包容しなければならなかった。

　この出口は見つけられた。しかにこの世においてではなかった。当時の事情では、それは宗教面での出口でしかありえなかった。

　（略）ギリシア人にあっては、死後に生き続けることは、むしろかなわないことだと考えられていた。そこへキリスト教がやってきて、来世における報償と懲罰とを本気で考え、天国と地獄を作りだした。そして労する者と重荷を負う者とを現世の涙の谷からつれだして永遠の楽園へと導いていく出口が見つけ出された。また事実、来世の報償を約束することによってしか、ストア的＝フィロン的な現世放棄と禁欲とをば、新しい、被圧迫人民大衆にとって魅力的な世界宗教の、倫理上の根本原理にたかめることはできなかったのだ」

（Ｆ・エンゲルス「原始キリスト教史によせて」『全集』２２）

◇興味深い視点
＊治療集団としての原始キリスト教団

「イエス山を下り給いしとき、大なる群集これに従う。視よ、一人の癩病人みもとに来り、拝して言う。『主よ、御意（みこころ）ならば、我を潔くなし給うを得ん。』イエス手をのべ、彼につけて『わが意（こころ）なり、潔くなれ』と言い給えば、癩病ただちに潔まれり」（「マタイ伝」第８章１－３）

「原始キリスト教団の主要な活動は、病気癒しの活動であった。マタイ、マルコ、ルカの三福音書には、なんと総数１１５話の病気癒しの物語が語られている。初期キリスト教においていかに治療活動が大きな比重を占めていたかがわかる。救世主イエスは、治癒神イエスとしてまずこの世に登場してきたのである」
（立川昭二『生と死の美術館』岩波書店）

© Royal Library of Belgium, Brussels.
「エヒテルナッハ福音聖句集」 11 世紀　アルベール 1 世王立図書館蔵

＊イエスが登場するまえのユダヤ社会では、病人は神に呪われた罪人とされ社会的制裁を加えるべき者とみなされていた。
＊イエスは、病人を汚れた者や罪人として扱うことをはっきりと拒否する。そして、すすんで病人に近づき、彼らの社会復帰を促す活動に身を挺する。
＊古代人は、病気を癒す力は、神の御業（みわざ）と考えていた。古代ギリシャでは、神話のなかに登場する医神「アスクレピオス」の神殿が「治療の聖地」だった。

「イエスはむしろ、ライ病、脳障害、盲人、肢体不自由者といった難病にたち向かう。イエスたちはこうした病人をもとめ、病人から病人へ、村から町へと旅する。いわば移動する治療集団、遍歴治療集団であった。
（略）地中海世界におけるキリスト教の勝利は、じつは治癒神イエスの勝利だったのである。キリスト教に改宗した最初のローマ皇帝コンスタンティヌスは、改宗の証しにアスクレピオス神殿の徹底的破壊を命じたのである」
（立川昭二『生と死の美術館』岩波書店）

＊触手による奇蹟療法が、教義として受けつがれ･･･
・「王の触手療法」、国王にも病気を治療する能力があるという考えにつながる。

◇迫害されたキリスト教が、なぜ広がったのか
＊一神教であったこと、信仰の強さ、助けあいや連帯の思想・・・

２。キリスト教の変質、そのなかにみる教訓

◇キリスト教が、ローマ帝国の国教となる（392 年）

＊それまではローマの国教は多神教だった。３９２年に異教禁止令がでる。

＊ローマ帝国がキリスト教を認めたのは、キリスト教が広がってしまったのが大きな理由だったが、ローマ帝国の統一を守るためにキリスト教を利用しようという思惑も働いた。

「これは同時に、キリスト教が迫害されていた人びとの宗教から、支配階級の宗教へと変質したことを意味しました」　（西本一夫『唯物論の歴史』）

◇権力と宗教が結びつくとき・・・手塚治虫『火の鳥』太陽編を読もう！

＊宗教の否定的側面が肥大化し、人びとの世界観・人間観を固定化させ、支配階級にとってまことに都合のよい道具へと変質する。苦難の原因から目をそらさせる。

３。封建制社会の哲学（哲学にとって、長く暗いトンネルの時期）

◇教父哲学・・・キリスト教の教義を組織化することを目的

＊知識と信仰との関係をつねに信仰を優位におくように解決することが要求された

◇アラブの哲学

＊イスラム文化圏の形成

＊アリストテレスの哲学を研究

◇スコラ哲学

＊すでに確立され協会によって説かれているキリスト教の教義を、相互に矛盾しないように調整し、それらがなぜ真理であるかを論証することをその目的とした。

＊思索の自由の範囲はさらにせばめられる

＊すべての学問が、神学のもとにおかれた

→神学とは、「一定の宗教の教義を体系づけて、神ならびに神と人間との関係についての理論的形態をとった解明をするもの」（森宏一『新装版 哲学辞典』）

「中世は、神学に、その他すべてのイデオロギーー哲学、政治学、法律学ーを併合し、神学に従属する部門にしていた」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

「坊主が知的教養を独占し、そのために教養そのものが本質において神学的な性格をおびることになった」（エンゲルス『ドイツ農民戦争』）

→アリストテレスの書物に対する禁止令も（1201 年と 1215 年に）

なぜ？ と問うこと、疑うこと、という哲学的（学問的）態度は、窒息させられる。ふたたび哲学が息を吹き返すのは、１７世紀～１８世紀･･･！

＊それは封建制経済の解体と同時進行で

次回（６月９日）は「資本主義を生み出す力となった思想・世界観」です。